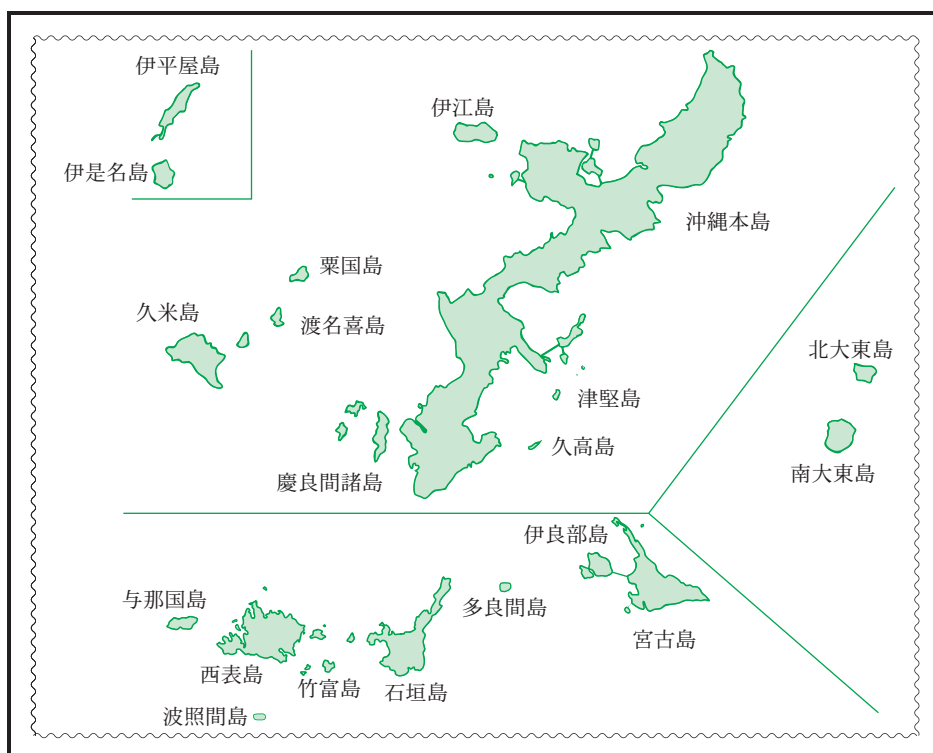




沖縄県小学校長会 沖縄県中学校長会

第 85 号

会 報



も く じ

1. 今年度の活動を振り返って
持続可能な社会の創り手の育成を目指すチーム校長会
豊見城市立長嶺中学校 校長 與那覇 正 樹 …… 1
2. 第64回沖縄県小・中学校長研究大会国頭大会
沖縄県小・中学校長研究大会国頭大会を終えて
名護市立羽地小学校 校長 大 城 勝 …… 3
3. 特色ある学校づくり
(1) コミュニティと連携し、地域の特徴を生かした活気ある学校づくり
北中城村立北中城小学校 校長 崎 濱 陽 子 …… 5
(2) 異学年集団で取り組む「魅力ある学校行事」
浦添市立仲西中学校 校長 平 良 亮 …… 7
4. 校長講話
(1) 一般書籍（ビジネス、健康、教育心理等）の知識を小学校
一年生の児童にも理解できるようにYou Tube動画解説する
豊見城市立伊良波小学校 校長 當 間 朝 成 …… 9
(2) 校長講話への取り組みについて
宮古島市立池間小学校 校長 下 地 忠 夫 …… 11
5. 第75回九州地区小学校長協議会研究大会佐賀大会
に参加して
共感と温感そして響感の佐賀大会
石垣市立伊野田小学校 校長 真玉橋 真由美 …… 13
6. 第74回全日本中学校長会研究協議会大分大会参加報告
第74回全日本中学校長会研究協議会大分大会に参加して
宜野座村立宜野座中学校 校長 渡慶次 靖 …… 15
7. 全国連合小学校長会研究協議会参加報告
最初で最後の全国連合小学校長会研究協議会に参加して
宮古島市立久松小学校 校長 友 利 直 喜 …… 17
8. 第74回 全日本中学校長会研究協議会大分大会 参加報告
未来へ つなごう 学びの力 豊の国 大分から
竹富町立大原中学校 校長 石 原 昌 英 …… 19

今年度の活動を振り返って



持続可能な社会の創り手の 育成を目指すチーム校長会

豊見城市立長嶺中学校 校長 與那覇 正 樹

一 はじめに

校長として学校を経営するなかで、ここ数年の学校を取り巻く環境は、学習指導要領の改訂、平成から令和、コロナ禍による制限と対応、GIGAスクール構想や令和の日本型学校教育の推進、コロナの制限緩和など、急速な変化を実感しました。そのなかで、校長会に携わり、全日中のテーマである「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」等、国の動向を見極め、学校教育の課題や在り方等、その重要性を認識させられた一年でもありました。また、全国や九州をはじめ、各地区校長会との連携など、予測困難な時代を生き抜く子どもたちを育成するために校長会がチームとして機能することの重要性にあらためて認識させられました。

そういつたなか、本年六月、新たな教育振興基本計画が閣議決定されました。本計画の基本方針として、「二〇四〇年以降を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げています。このような国の施策の推進を念頭に置きながら、校長会での取組を紹介し、今年度の活動を振り返りたいと

思います。

今年度開催した第六十四回沖縄県小・中学校校長研究大会国頭大会は、四年ぶりに県内の校長が一堂に会し参集型での開催となりました。そのなかでの講演会、その趣旨を踏まえた分科会における協議や事例の共有は、大変有意義なものでした。また、全国・九州の理事会への参加は、国の方向性を把握する上でたいへん重要な場となりました。さらに県校長会の活動である各地区教育懇談会や行政との連絡会による情報交換等は、新たな教育施策を推進する上で重要な活動となりました。

このような県校長会の活動が、それぞれの「学校経営の充実」や「持続可能な社会の創り手の育成」等、国や県の施策の推進に繋がると考えております。本文で県校長会の活動の様子を紹介し、その活動を振り返ることで県校長会がチームとして更なる発展・充実を期待しております。

二 全国・九州理事会をとおして

今年度は、コロナ行動制限緩和もあり、全国・九州の理事会等が参集型での開催となり、各県の校長先生方と懇談の機会を得ることができまし

た。全国・九州理事会や第七十四回全日中研究協議会大分大会等をとおして「令和の日本型学校教育」「教育振興基本計画」「教員の未配置問題」「特別支援に関わる教師の専門性」「教員採用選考試験の在り方」「定年引き上げにかかる役職定年等」「働き方改革」「部活動の地域連携、地域移行」等、説明会や情報交換会が開催されるなど、有意義な情報共有の場となり、充実した全国・九州理事会及び研究協議会となりました。

このような理事会及び研究協議会での情報や施策の共有が、本県校長会の活動をより一層充実させ、協働、共有の深化を図り、一丸となって新たな課題への対応をめざす校長会の方向性に繋がっていきます。今後、校長会の更なる発展のためにも、会長の理事会への参加に加えて、これまで以上に研究協議会への積極的な派遣を推進していくことが、校長会の発展にも繋がっていくと考えます。会員の皆様のご協力をお願いします。

三 県小・中学校長研究大会（国頭大会）

第六十四回沖縄県小・中学校長研究大会国頭大会は、「あけみおのまち」名護市の中央公民館を主会場に、小学校二二六校、中学校一三六校の校長先生方が四年ぶりに一堂に会し、参集型での開催となりました。大会は、国頭地区校長会の大城勝小学校会長、渡具知久浩中学校会長のリーダーシップのもと、国頭地区小・中学校の五十五名の校長先生方が、開催に至るまで細やかな配慮を重ね、素晴らしい環境を整え、円滑な運営を実現してくださいました。そのご尽力と心温まるおもてなしに感謝申し上げます。

小学校は「新たな知を拓き人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を

受けて十分科会、中学校は「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」を受けて六分科会、それぞれの分科会において、学校の経営者としての使命感と教育理念に基づいた活発な協議がなされました。また、今回、初の試みとして、全分科会において、共通課題「自学自習力の育成」について協議しました。どの分科会においても、それぞれの学校課題を明確にした事例や成果を発表し、実りある協議会でした。参加による校長先生方の笑顔や熱く語る表情が印象的でした。さらに、県教育委員会の半嶺満教育長、国立教育政策研究所の千々布敏弥総括研究官のご講話を拝聴し、今後の学校経営について多くの示唆をいただきました。

このように研究大会の内容は、校長としての「理念と指導性」「学校経営者としての使命感」を高め、今後、様々な施策の推進に繋がる重要な役割を示すものでありました。今回の研究大会国頭大会の成功は、その意義や趣旨を達成し、役割を十分に果たせたものと安堵しております。研究大会に携わった多くの会員に感謝と敬意を表します。

四 本年度の活動

(一) 地区教育懇談会

地区教育懇談会は、各地区校長会役員と県校長会役員が、各地区の教職員の処遇や諸条件の整備等の課題を共有し、学校教育に資することを目的に実施しております。今年度は、コロナ行動制限緩和もあり、六月から七月にかけて国頭地区を皮切りに宮古、八重山を含む六地区すべてにおいて懇談会を実施することができました。教員の未配置問題、働き方改革、教員採用選考試験の在り方、スクールロイヤーの要請、定年引き上げにかかる

役職定年等、各地区ごとに、様々な意見や要望があり、校長先生方がご苦労されている現状と課題解決へ向けて努力していることがわかりました。このようにの情報交換方や協議を交えた有意義な懇親会となりました。その後、各地区懇談会から得られた情報は、県校長会教育行財政部がとりまとめ、県役員会で議論を重ねた後、「校長会と行政との連絡会」において要請し、解決に向けて取り組みました。

(二) 校長会と行政との連絡会

校長会と行政との連絡会は、県校長会と教育行政が緊密な連携を図り、学校の管理運営等に関して理解を深め、学校教育の一層の充実に期することを目的に年三回実施しています。

第一回は義務教育課からの行政説明、第二回は県校長会からの要望事項説明、そして、第三回は要望事項に対する教育行政からの回答があります。前述の地区懇談会から得られた情報をもとに県校長会教育行財政部がまとめ、県役員会で議論を重ねた後、「校長会と行政との連絡会」において新規及び継続、さらに加筆された内容の要望を提出しました。県教育庁の関係各課においては、人事や予算に係る法的条件整備等が追いつかず、ご苦労されていることが伝わりました。しかしながらどの要請事項においても前向きに取り進む姿勢が感じられ、学校現場の思いを率直に伝えることで、時間はかかりますが様々な改革の実現に繋がることを確信しています。

(三) 研究活動

本会の研究活動は、調査研究部、生徒指導委員会、教育改革委員会、学力向上推進委員会が成果をまとめ「研究紀要」として発刊しております。今年度の研究大会(国頭大会)では、学力向上推進委員会

の仲地千佳校長と、教育改革委員会の赤嶺智郎校長がそれぞれ活動報告を行いました。「研究紀要」の研究及び実践報告の内容を多くの会員が参考にし、各学校で活用を図って頂きたいと思えます。

五 おわりに

これまで、コロナによる様々な制限から緩和等への対応をはじめ「GIGAスクール」「キャリア教育」「働き方改革」「主体的で対話的な深い学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」の実践、また「持続可能な社会の創り手の育成」「ウエルビーイングの向上」等、様々な施策が学校現場に求められています。さらに、「不登校」「いじめ」等、学校を取り巻く課題は山積しており、校長のリーダーシップが求められています。このような時代にこそ、「チーム校長会」として互いに連携、協力しながら対応していくことが大切ではないでしょうか。これまでも、これからも「チーム校長会」として、課題解決に邁進する質の高い組織として機能していくことを期待します。次年度は、第六十五回沖縄県中学校長研究大会中頭大会が中学校単独で、小学校においては、第七十六回九州地区小学校校長協議会研究大会沖縄大会が開催予定です。充実した実り多い研究大会になるよう「チーム校長会」として、協力して準備を進めてまいります。結びに、これまで支えて頂いた校長会役員や事務局の皆様をはじめとする全ての会員の皆様に感謝し、令和五年度のふり返りとなります。

校長昇任(令和五年八月十八日発令)

うるま市立兼原小学校 校長 島袋盛章

校長発令(令和五年十一月一日付)

豊見城市立豊崎中学校 校長 大城正篤

第六十四回沖縄県小・中学校長研究大会・国頭大会



沖縄県小・中学校長研究大会 国頭大会を終えて

名護市立羽地小学校 校長 大城 勝

一 はじめに

令和五年度、第六十四回沖縄県小・中学校長研究大会が、十一月十五日（木）、十六日（金）、県内公立小・中学校長が一堂に会して、あけみおのまち名護市で開催されました。名護市民会館を主会場に小学校分科会を名護中央公民館、二十一世紀の森体育館、名護市労働福祉センター、タピックスタジアム名護の四会場で十分科会、中学校は、名桜大学内の北部生涯学習センターで六分科会が行われました。

二 地区の取組

令和元年度に、国頭で開催された県大会の後、参集型による開催は叶わなかったため、対面・フルスベックでの開催は四年ぶりとなりました。過去三年間の事務資料や写真資料等が十分ではなく、四年前の国頭大会の資料をあさりながら、準備を進めてきました。

県大会へ向けての実行委員会は、国頭地区小・中学校長会通常の総務部、研究部、調査研究部、行財政部の四部会を生かしながら、組織を編成して取り組んできました。

会場借用については、前年度から名護市関係部局と調整を行いました。しかし、すぐに大きな障害にぶつかりました。主会場となる名護市民会館や小学校分科会を予定している施設周辺において、サイクルスポーツ『ツール・ド・おきなわ』の準備・関連行事等が計画されていることでした。駐車場や宿泊施設等の混乱も予想できたため、『ツール・ド・おきなわ』関係部局、県校長会役員と何度も相談・調整を行いました。結果、本校長研究大会を、一週間遅らせて開催することとなりました。日程変更により参加が叶わなかった方がいらしたかと思えます。この場を借りてお詫び申し上げます。

中学校分科会場は、名桜大学内北部生涯学習センターで開催の準備を始めました。しかし、名桜大学の学生駐車場が改修工事のため、中学校会員の駐車場が確保できないことがわかり、急遽大型バス三台を手配し、スムーズな移動に配慮しました。今年度に入り、五月十八日、地区の役員である各部長・中央委員・企画委員（正副会長・事務局・会計）で、実行委員会結成準備委員会を開催。県大会へ向けた総務部長、運営部長、研究部長を決

め、そして、各部の仕事内容やメンバー構成、前回令和元年度国頭大会の反省事項等の確認を行い、結成総会へ向け、準備を整えました。

六月十九日には、国頭大会実行委員会結成総会を開き、宮城敬地区事務局長（大北小学校）から役割分担やこれからのタイムスケジュール等について説明があり、国頭地区全会員五十五名がベクトルを揃え、走り出しました。国頭地区会員数の関係から、一人二役、あるいは一人三役を担わなければならない状況がありますが、積極的に関わってくださる本地区会員の温かさを強く感じる総会となりました。

八月十五日、総務部、運営部、研究部の三部長のリーダーシップの下、各部の推進計画細案の作成に取りかかりました。

十月十三日、全体会、係会を持ち、各部の進捗状況や大会期間中の会員個々の動きの確認など、一か月後に迫る大会へ向け、当日をイメージしながら最終確認を行いました。

大会までに、八回の実行委員会、三回の全体会を実施してきましたが、回を重ねる毎に、各部・各係の計画が概略版から細案版に変わっていきまし
た。全会員が自分事としてとらえ、横のつながりを大切にしながら、互いに補い合い、当日までの準備を進めてきました。国頭大会を成功裏に終えたいという共



通の目標達成に向け、準備万端整え、当日を迎えました。

三 大会一日目

開会式では、大会長宮國義人県小学校長会長の挨拶、半嶺満県教育長挨拶、仲本千佳子県市町村教育委員会連合会長祝辞、岸本洋平県PTA連合会長祝辞、渡具知武豊名護市長歓迎の挨拶等を粛々と滞りなく進めることができました。

続いて半嶺満県教育長から、「本県の教育課題と対策」の演題でご講話いただきました。まず、教員の未配置問題にふれ、解決へ向けた教育委員会の取組を具体的にお話下さいました。また、働き方改革についてお話がありました。教員の心身の健康保持、子と向き合う時間の確保のための環境整備等について、働き方改革推進課の取組をはじめ、紹介していただきました。そして、学力向上については、全国学力学習状況調査の結果から、本県の課題、各学校での結果の活用等についてご講話下り、学力向上は何のためなのか、自校の取組等について、全校長が立ち止まって考える時間をいただきました。対面による教育長講話の必要性を改めて感じる講話となりました。

午後の分科会は、小学校は四会場で十分科会、中学校は、一会場で六分科会を開催しました。分科会Iでは、提案地区の実践の成果を共有し、四人程度のグループの中で各地区の実践を『地区別提案資料』を手元におき、紹介し合いました。その後、研究協議に入り、具体的な方策と校長の指導性について意見交換を行いました。続く分科会IIでは、今回が初の試みとなる全分科会共通課題で協議を行いました。全校長が、県学力向上重点課題である『自学自習力の育成』について考え、

意見や情報を交換する大変有意義な時間となりました。

夕方の教育懇談会は、名護市民会館中ホールで、多くの会員が参加し、盛大に行われました。四年ぶりの対面ということもあり、横のつながりの大切さを各会員が感じながら、笑顔で懇談する姿が印象的でした。宮國義人大会長の挨拶に始まり、岸本敏孝名護市教育長歓迎の挨拶、宮城肇義務教育課長祝辞、喜友名悟国頭教育事務所長の来賓挨拶、そして、八重山地区から飛び入りの出し物があり、終始和やかな雰囲気の中で会が進められました。

四 大会二日目

大会二日目は、全体協議会の中で、教育改革委員会赤嶺智郎委員長（とよみ小学校）、学力向上



推進委員会仲地千佳委員長（城西小学校）の両者による報告と小学校総務部松尾剛部長（山田小学校）による大会宣言文読み上げが行われました。記念講演は、国立教育政策研究所総括研究員千々布敏弥氏をお招き



し、「学力向上に向けた教師エージェンシーの在り方」の演題で講演をいただきました。沖縄県の現状や今後取り組む方向性、やる気をもって主体的に関わる力を身に付けること等、私たち校長に多くの示唆をいただきました。

開会式では、小学校研究部田島正敏部長（宮城小学校）による総括が行われました。

五 終わりに

四年ぶりの対面開催で多くの不安がありました。が、国頭地区全会員が「隣には校長仲間がいる」「やんばるは一つ」の合い言葉の下、協力体制を整え無事終えることができました。労を惜しまない仲間がこの場を借りて感謝申し上げます。ここ国頭がフルスペック大会の再スタートの地となり、成功裏に終わられたことは、今後の地区の活動の支えとなります。大会準備等を通して、会員の絆がさらに強固になったことが国頭地区としての大きな成果の一つでもあります。

さて、次年度、小学校は九州地区協議会研究会沖縄大会、中学校は単独での中頭大会となります。小中別々の大会となりますが、県内校長全員で、有意義な大会となるよう一枚岩で取り組んでいきたいと思います。校長先生方が大いに語らい、学び合える日を楽しみにしています。

結びに、県校長会・役員の方皆さん、事務局の崎原永輝事務局長・比嘉紘美さんには、事前準備から大会当日の運営まで、お力添えをいただきました心から感謝申し上げます。会場借用等でご配慮下さいました名護市教育委員会、北部生涯学習センター、関係機関の皆様、大変ありがとうございました。今後とも沖縄県校長会の益々の発展を祈念いたします。

特色ある学校づくり



コミュニティと連携し、地域の特徴を生かした活気ある学校づくり

北中城村立北中城小学校 校長 崎濱 陽子

一 はじめに

本校は、北中城村の中央部に位置し、西側に東シナ海、東側に太平洋、南側に中城城を望む風光明媚な高台にあり、緑の多い学校である。

昨年、本校は一二〇周年を迎えた。しかし、ここ三年間はコロナ禍で行事が減り、児童が楽しめる場や認められる場が少なく、成功体験や達成感、充実感を味わえていなかった。

体育館での集会を取りやめ、放送室と教室を繋ぐオンライン朝会、少人数での卒業式や入学式へと学校行事が変化していった。そうなる、保護者や地域の方の訪問もほとんどない。コロナ禍の三年間は、人との関わりや地域との関わりが少なくなってしまう。そこで、子ども達の学びを応援してくれる地域の人達のつながりや元気の出る学校づくりを中心に紹介する。

二 児童会の取り組みで子ども達を元気に

児童会の子も達は、ほとんど訪問者がいない学校を元気にしようと「北小一二〇周年プロジェクト」を考えた。テーマは「元気いっぱいパ

2. 活動の流れ(案)

学期	実施月	内容	主になる委員会・学年	担当学年	担当者
1学期	6月	スローガン決定 『元気いっぱい、パワーMAX!』 『ひまわりのように前を向いて 挑戦する 北中っ子』	児童会・4年以上		
	7月	学校にひまわりを咲かせよう(苗植え) →自治会へ苗のプレゼント 北小の歴史を知ろう (北小の歴史をロイノートに作成・発表→各学年に配信)	児童会・栽培委員会		
	7月	北小歴史クイズ	児童会・掲示委員会	3	祥子
2学期	10月	北小の自慢を見つけよう	児童会・代表委員会	4	茂幸
	10月	北小マスコットを作ろう (全校児童から応募→投票→表彰)	児童会・給食委員会・放送委員会	5	佳子
	10月	あいさつの力で壁面を完成させよう	児童会・図書委員会(壁面)		
	10月	スポーツ大会 (隔学年・兄弟学級など)	児童会・体育委員会・放送委員会	2	永勇
	11月	あいさつの力で壁面を完成させよう	児童会・飼育委員会(壁面)		
	11月	「ありがとう」を伝えよう	児童会・生活委員会・保健委員会	1	祥子
3学期	1月	あいさつの力で壁面を完成させよう	児童会・放送委員会(壁面)		
	1月・2月	発信しよう!北中城小の良いところ	児童会・6年生	6	美歌

ワーMAX ひまわりのように前を向いて挑戦する 北中っ子」である。まず、全校児童に「北小一二〇年のあゆみ」として、北小の歴史をわかりやすく紹介した。その後に、児童会が「一二〇周年プロジェクト」を考え、実行した。児童が主体的に活動できるように提案・伝達し、自治的活動の場をしかける時間と、行動を起こし、

振り返りさらに次の活動へ向かう時間をそれぞれ確保した。また、活動の様子が分かるように、掲示物を作成し、取り組みの紹介と感謝や激励メッセージを添え、児童の努力や成長を承認・勇気づけていくことができた。



北小マスコットづくりでは、低・中・高学年の部へそれぞれ自由に参加してもらい、全校児童で審査し選出した。それを地域の有志の皆さんが、子ども達のアイデアをクリアファイルという形にした。

このように、テーマを意識して実施した取り組みは、学校全体で「一二〇歳」を祝う雰囲気をつくり、笑顔でプロジェクトを楽しむ子が多く見られた。

三 地域の人を「学びの応援団」に

(一) 遊休地を利用した田んぼづくり

五年生は、総合的な学習の時間と社会科の授業で米作りに挑戦している。昨年度は、バケツ田んぼで生長の様子を観察していたが、夏の驚異的な暑さで、バケツの水が温水状態になり、全く育たなかった。種から苗を育て、それをバケツに植え付ける、それを三回繰り返したが、全滅状態であった。今年は、その反省を活かし、本校保護者の後藤道雄さんに田んぼづくりを応援してもらっている。後藤さんは、「社会的企業じねん(自然)組一級建築士事務所」の代表を務めている。社会的企業とは、社会的課題の解決というミッションを持ちながら人格形成、環境保全、環境教育、健全な青少年育成、まちづくりなど社会の課題を解決する目的を持った企業である。後藤さんは、学校



から歩いて、一五分ほどの遊休地を、地主さんの協力を得て整備し、棚田にした。「無農薬と化学肥料を使わない米作り」を目指して、子ども達に田んぼ作り教えにくれた。「あぜ作り」や「代掻き」の方法も初めて体験した。肥料は、日本在

来の与那国馬の糞を利用して作ったものを活用した。地域の方々の協力を得て、校外に田んぼを造り、定期的にタブレット端末を持って稲の生長を観察した。「害虫・益虫・ただの虫」も観察する中で理解し、同時に稲の状態を把握していった。この棚田には、一番高い場所に小さなトンボの池、一番低い場所に沈砂池が設けられた。沈砂池は、赤土や泥が下水に流出するのを防ぐ造りになっている。子ども達は、この活動を通して、自然の恵や循環型農業を知ることができた。



(二) 「EM研究機構」の皆さんとの連携

学校の裏手にEMホテルがあり、EM菌を研究している「EM研究機構」の皆さんがいる。本校では、昨年から四・五・六年生を対象に環境学習として、「地球にやさしい」EM菌の働きを学んでいる。

EMは、人にも環境にもやさしい乳酸菌、酵母、光合成細菌などの善玉菌の集まりを指す。E



Mの特徴として、①土が元気になり、植物が育つ。②畜産では、悪臭が軽減し、お肉がおいしくなる。③海や川では、生態系が豊かに蘇る。④家では、ニオイや汚れを分解しホコリの付着を抑え、健康的で快適な空間を促進するなどの働きがある。



子ども達は、EMの働きを学んだ後に、実際に「EM活性液」を作り、水泳学習後のプールに投入しその効果を試していく。今年のプール清掃では、水で流すだけで藻やぬめりが取れ掃除しやすくなっていた。

今年度は、五年生と六年生の社会科の学習計画に位置付けて学んでいった。今後は、EM研究機構の皆さんと連携し、EM活性液を自分達で増やし、委員会活動や清掃時間に、トイレや学級の花壇にも活用して行く予定である。

(三) 「北中城村型キャリア教育」の実践

① 北中城村グッジョブ地域連携協議会とは

北中城村では、早期から正しい産業理解や職業理解、生きる力を育むキャリア教育によって、人材を育てていくことを目指し、「北中城村型キャリア教育」に取り組んでいる。この取り組みは、北中城村グッジョブ地域連携協議会が中心になって実施している。地域の産学官が協議会を中心に協力し、地域の特性や課題に応じた「早期からの

人材育成」を推進している。村の将来を担う人材の育成についてアイディアを出し合い、実践している。活動内容は、小・中・高と段階を追って、計画されている。

② 小・中・高の取り組み

- ・小学生—ジヨブシャドウイング（働く人に寄り添い観察する）
- ・中学生—校内ハローワーク（講話）・職場体験
- ・高校生—地域探検学習（課題解決）（参加型）

③ 本校の六年生の取り組み

- 〈事前学習〉十一月～十二月
 - ・動機づけ—職業人講話①②・マナー学習
 - 〈活動〉—ジヨブシャドウイング（一月後半）
 - 〈事後指導〉—振り返りと成果発表（二月頃）
- 毎年、六十以上の事業所が子ども達を受け入れてくれる。ジヨブシャドウイングから帰ってくる子ども達は、いつもキラキラと輝いている。

三 おわりに

地域の人々とのつながりを通して、子ども達にたくさんの笑顔と深い学びの機会を与えることができた。そして、学校全体にも活気が戻ってきたとも感じる。今回紹介した本校の取り組みは、地域の大人達が、村の将来を担う子ども達と本気で向き合い支えてくれた実践である。北中城村の魅力と人材の豊かさを実感した。今後もコミュニケーションを軸とした、人とのつながりを大事にしたい。

特色ある学校づくり



異学年集団で取り組む

「魅力ある学校行事」

浦添市立仲西中学校 校長 平良 亮

一 はじめに

本校は、琉球王朝発祥の地である「てだこの都市（まち）浦添」の西側に位置し、学制改正により、昭和二十三年四月に仲西小中学校併置校として仮校舎でスタートしました。



その後、昭和三十三年に小学校より分離し、独立校となりました。昭和三十五年には米軍の奉仕作業により敷地作業が完了し、現在の学校所在地である通称「屋富祖丘」に移転し今日に至りますが、創立以来、体育系・文化系活動が活発な「文武両道」の校風を樹立しております。

また、県内学校の先駆けとして昭和四十九年度から図書館活動の研究を推進するなど、「朝の読書活動」発祥校でもあります。

平成十二年には地元浦添市で開催された全国中学校ハンドボール大会で男子、翌年、山口県で開催された同大会では女子が見事全国制覇をなし遂げました。

その他の部活動においても、毎年のように九州や全国に生徒を派遣するなど、多くの素晴らしい実績を収めてきました。

平成二十八年一月には東京都で開催された文科省主催「全国いじめサミット」に県代表として生徒会役員二名が派遣され、その取り組みが現在も「H O T ハートプロジェクト いじめ撲滅」として生かされております。

さらには平成三十一年度・令和二年度の二年間にわたり、文部科学省指定「道徳教育の抜本的改善・充実に係わる支援事業」研究校として、生徒の道徳性を高める授業づくりに全職員一丸となつて取り組み、大きな成果をあげております。その研究成果は今現在も引き継がれ今日に至っております。

創立七十六年目を迎える今年度は、一学年八学級（二百七十三名）二学年九学級（二百八十九名）三学年九学級（三百六名）、特別支援学級七学級（四十四名）の合計九百十二名でスタートしましたが、生徒会活動、部活動等のそれぞれに素晴らしく活躍を見せ、全校生徒が一丸となり「楽しくて魅力ある学校」づくりに向け、日々一生懸命頑張っております。

二 本校の実態

本校はこれまで、生徒会活動における異学年による団の取り組みやドリカム研修会（生徒主体の研修会）を通して、学校行事の企画・運営等を生徒自ら実践する自主的活動が行われてきました。

その結果、生徒の自己肯定感や自己有用感が高まってきており、沖縄県生徒質問紙調査の「あなたは学校が楽しいですか」の項目では県平均より高い数値を示し、自校の学校に誇りを持ち愛校心が育っていると言えます。

さらなる「魅力ある学校づくり」を目指すため、これまでの生徒会活動、学校行事を深化させ、学級活動とより連動させながら個の育成を図ることを目的に「夢実現をめざす個が育つ自治的集団づくり」を校内研の主題に設定し、令和四年度・五年度の二カ年間取り組んできました。

今年度五月に開催された生徒会総会では、「仲中をこんな学校に」と三つの目標が提案・承認され、日々の生徒会活動を中心に全校生徒一丸となり、目標達成に向けて取り組んでいます。

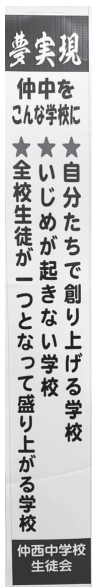
その中で、生徒会が主体となつて行っている本校の特色ある取り組みを三つ紹介いたします。

三 取り組みの実際

（一）「ドリカム研修会」の開催
リーダー研修会に代わる研修会で、生徒主体で実施（縦割り団による取り組み）

【ねらい】

- ・夢実現フェスティバルの成功や、いじめ撲滅に向けて学校全体や団で協力して取り組む。
- ・生徒が主体となり、事前準備に取りかかる時間



とする。

・集団活動や異学年交流を通して、仲を深め、より良い集団づくりをする。

【研修の流れ】

七月・第一回事前研修

「夢フェスのテーマを考えよう」(講師：教頭)

・第二回事前研修

「リーダーとは」(講師：校長)

八月・生徒会朝会

「夢フェスの内容の確認」(全校生徒対象)

・第一回ドリカム委員会

「ドリカム本研修に向けての確認」(対象：全学年ドリカム委員)

※ドリカム委員(各学級の級長を中心とした学級代表で構成)

九月・「第一回ドリカム研修会」

縦割り異学年集団六グループや各学級で活動

★団の合い言葉決め

★生徒演目での選手決め

★団による演技の提案と練習等

十一月・「第二回ドリカム研修

★「HOTハートプロジェクト」いじめ撲滅」の取り組み(全校生徒)

(二)「夢実現フェスティバル」の開催

運動会に代わる行事として創立七十周年を記念して行われました。その後継続され、今年度も「夢実現フェスティバル七十六」として十月一日に開催しました。

一年生から三年生を縦割りで六つの団に編成し、団ごとでお互いが競い合って行われ、開催に向けては、「生徒会総務」や「夢フェス実行委員」の生徒が中心となって企画・運営を行っています。生徒たちは「自分たちで創り上げる行事」「全

校生徒が一つとなって盛り上がる行事」を目指し、総団長、六名の各団長や各実行委員を中心に進められます。生徒自身が自ら創り上げていく取り組みに重きが置かれるため、一人一人の眼の輝き、意欲が違います。

特に最後のフィナーレは全校生徒の一体感が最高潮に上り、生徒のみならず、教師や参観している保護者も併せて感動の場面となっています。



(三)「HOTハートプロジェクト」いじめ撲滅」の開催【ねらい】

① 「どんな理由があっても、いじめは絶対に許せるものではないことを理解させる。」

② 「自分たちの課題を自分たちの力で解決しようという自治意識を育てる。」

今年度も十一月に開催しました。学級討議や縦割りの団による討議を実施し、全校生徒で「いじめ撲滅」に向けた取り組みを行っています。

令和三年度は「いじめ撲滅スローガン」を決定し、令和四年度は「いじめ撲滅六か条」を決定しました。

今年度は過去二か年間の取り組みを踏まえ、「お互いのいじめの認知度の確認」、「現在起こっているいじめの実態」、「今、自分たちにできる撲滅に

向けた取り組みはどのようなことか」について学級や縦割り団による討議を深めました。決して「いじめゼロ」を達成してはいませんが、「いじめは絶対にダメ」との生徒一人一人の意識は高まり、全校体制で「いじめ撲滅」に向けて日々取り組んでいるところです。

HOTハートプロジェクト

【仲西中いじめ撲滅スローガン】

君はすてきだ

一人で悩むな 俺がいる

仲西中学校 生徒会 令和3年度作成



異学年の団による討議の様子



HOTハートプロジェクト ～君はすてきだ 一人で悩むな 俺がいる～ (R3年度 作成)

仲西中いじめ撲滅 6 力条 (R4年度 作成)

A	困っている人がいたら、積極的に助けてあげる 超英雄!	D	まずは相談 仲間を信じる 助け合い 支え合い
B	お互いで声をかけて 周りを日頃から Look! Look!	E	多くの人と積極的な学校行事を通じて コミュニケーションをとり、いじめを助けている人が 助けを求めやすい雰囲気全員で作ります
C	皆でえがこう!! Happy Smile	F	心がホッコリする言葉を使おう!

第75期中学生 制作

四 おわりに

大規模校だからこそ、意図的・計画的に異学年での交流活動を計画・実施する必要性を感じています。引き続き「魅力ある学校づくり」に向けて、学級活動と生徒会活動とを連動させた取組の充実を図り、生徒の自主的・実践的な態度の育成に努めていきたいと思えます。

校長講話



一般書籍（ビジネス、健康、教育、心理等）の知識を小学校一年生の児童にも理解できるようにYouTube動画解説する

豊見城市立伊良波小学校 校長 當間 朝成

一 はじめに

本校は、令和五年度で創立三十七年目を迎え、児童数五百二十五人、職員四十三人、通常学級十七、特別支援学級五、計二十二学級の学校である。校内は、都会の喧騒を離れ、豊かな自然環境が広がっており、落ち着いて学習する環境に恵まれている。本校の児童は、とても素直で何事にも真面目に取り組む姿が見られる。

私は、本校に赴任して三年目となるが、赴任当初の令和三年度は、児童数六百人だった。直近の三年間で実に七十五人の児童数が減少している。要因の一つは、施設の老朽化もあるだろう。

本校の学校施設は、決して新しくはないが、本校に赴任する多くの職員は、自然豊かで落ち着いた学習環境により、「伊良波小学校に我が子を通わせたい」と口を揃えて話している。私自身も何校も転勤を経験してきたが、これほどまでに児童が落ち着き、学習に集



中する様子が見られる学校は初めてであった。素直で学ぶ意欲の高い本校の児童が、多くの知識とより良い情報を得て、思考・判断力を養い、行動して欲しいと願う。

二 校長講話について

本校に赴任した令和三年度は、新型コロナウイルスの影響で全児童が体育館に集合することはできなかつた。そのような状況において、校長講話を今後どのように実施するのか、思考錯誤の日々だった。

当初は、Google Meetを利用して画面を通して児童に話していたが、画面前に児童がいるわけではないことから、カメラに向かつて話すことに違和感を覚え、もっと自由に楽しく校長講話ができないかと考えるようになった。そこで、講話を動画撮影し、パワーポイントに動画を挿入して、校内配信したところ、



児童の反応が良く、「校長先生、ありがとう」という声が聞こえてきた。児童の感謝の声に突き動かされ、年間十回の校長講話の回数をもっと増やすことを計画した。

(一) 給食時間に動画配信

令和四年度、新型コロナウイルスの影響は続き、給食時間はグループで食事をする事ができず、一列前方を向いて黙食していた。その様子から、児童は給食時間に静かに集中できる環境にあることに気づき、校長講話を動画配信すれば、児童が自然に集中して、話を聞いてくれるに違いないと考えた。そこで、毎週水曜日の給食時間に動画配信することにした。講話回数が年間五十回程度になることから、話しの内容は、以前から読んできたビジネス書や健康・教育心理等の内容を小学校一年生の児童にも理解できる内容で配信することにした。早速、今までの読書ノートから要点を三つに絞り、内容を平易な言葉を用いながら、細かく説明したメモを作成した。

(二) 三行×四行にまとめる

校長講話の動画撮影は、思いの外、緊張する。最初の撮影は、「えーっと」などの無駄な言葉が目立ち、改善が必要だと感じた。そこで、メモ書きを全く見ずに、三つのポイントだけに絞り、視線をカメラにだけ合わせて話すように努力した。

教師は、児童に話すことが仕事であり、緊張することも少ない。一度も小学校一年生の担任を受け持ったことはないが、なるべく小学校一年生でも理解できる内容で話すことを心がけた。



(三) 動画編集は楽しい

これまでは、パワーポイントを使った動画配信だったが、もっと楽しく工夫できないかと考え、DaVinci Resolveという無料ソフトをダウンロードして、動画編集を一から勉強した。十分程度の動画を撮影してパソコンに取り込み、ソフトで動画編集をするのだが、かなりの時間を要する。

一本目の動画編集は、丸一日かかった。それでも動画編集に取り組むと、文字の出し方や画面の切り替えなど、一話ごとに内容も動画編集もレベルアップしてきた。動画編集の操作が慣れてきたとは言え、十分程度の動画編集が四〜五時間に短くなったが、もっと時短できる方法はないかと考えていた。

そこで、パソコン編集からスマホ編集に変えCapCutというアプリを使用し、定型フォームで動画編集を行ったところ、二〜三時間で編集できるように became。動画編集には、Canvaというサービスを利用することで、児童が興味を持ちそうな動くイラスト等を使って、楽しめる動画に仕上がった。また、校長室で動画撮影を行い、人物切り抜きのためのグリーンバック等を設置した。



三 校長講話の実際

令和五年度は、毎週火・金曜日の週2日の給食時間に動画配信している。

講話の内容は、本の要旨を三つのポイントにまとめ、児童が学校生活や家庭でどのように活用で

きるかを考えた。動画では、児童に疑問を投げかけ、一緒に考えていく内容にした。大人向けで、児童には難解の本であるが、学校生活、家庭で活用・実践できるように具体的な事例を取り入れながら、平易な内容を目指した。動画では、ひらがなやイラストを多用した。

動画の構成は、サムネイル(動画の見出し)でスタートし、学校や家庭で困っていることなどの例を話す。その解決策として三つ、四つのポイントを順に話していく。後半では、復習として話の要旨を別の事例から繰り返し話すことで児童の知識としての定着をねらった。

四 YouTube 限定配信 (保護者向け)

校長講話は、一般書籍の内容をまとめたものであることから、保護者の方にも視聴してもらいたいと思ひ、教育機関との調整の上、YouTube 限定配信を開始した。Google site を作成し、YouTube 動画と学校だよりを視聴することができるようにした。周知方法として、本校が利用しているマチコミで全保護者に一斉送信をして視聴を促している。複数の保護者から、「とても役立つ内容です」との感想が聞かれるようになっていた。



五 終わりに

校長講話を動画配信することにより、児童との距離感が縮まり、校長に対して多くの児童が親しく声をかけてくれるようになり、校長室にかけつけては、「校長先生、今日の動画も楽しかったよ」、「動画に出演している犬(自宅で撮影した時私の

のペット)は、校長先生の飼っている犬ですか?」 「動画の背景に一瞬グリーンバックが見えましたよ」と話をする児童も見られた。校長講話の動画配信を通して、児童と触れ合い、学校生活や家庭生活で役立つ学びを深められていると実感している。これからも児童に役立つ校長講話動画配信を続けたい。

校長講話の内容一覧です。

1	守って欲しいこと	26	与える人になろう
2	てくてく登校のよいこと	27	自分が考えた以上の人にはなれない
3	おなじところさがしをしよう	28	満足できる作品を作り出す
4	赤ちゃんは歩けないとは思わない	29	細部に神は宿る
5	読書で得る3つのこと	30	やる気を引き出すARCS
6	目標を達成する3つのコツ	31	話す書く3回
7	ほめじょうずになろう	32	お返し力の返報性の法則
8	ゲームのように勉強しよう	33	続ける力一貫性の法則
9	なりたい自分になれるコツ3つ	34	できるという言葉の影響
10	人の責任、自分の責任、成長するのはどっち?	35	子犬と子猫で勉強アップ
11	ピンチはチャンス	36	勉強はすぐ上からず2次曲線でアップする
12	あなたが変われば、周りも変わる	37	ポジティブ、ネガティブは、脳が作る
13	自分の好きなことを見つけてよう	38	好奇心こそ 最強のパワー
14	目標の立て方wopの法則	39	先送りしないことと うれしいことが起こる
15	話し上手になろう! ep法	40	あなたに打たれた槍を取ろう
16	目標の立て方smar11方式	41	やる気が出るのは 難しさ50%の問題
17	習慣にしよう66日	42	習慣することの良さ
18	片付け習慣	43	最初と最後が肝心 初頭効果とピークエンド
19	成功したいなら失敗しよう	44	話のうまい人になろう 会話のチャック
20	感謝する力	45	話し方のコツ3選
21	スモールステップ	46	物語風に伝える ストーリーテリング
22	時間はあなたの命のかけら	47	悪い習慣を良い習慣に置き換える
23	自分を好きになろう 自己肯定感	48	やり抜く力 グリッド
24	30分早起きして勉強しよう	49	あなたの思った通りになる
25	人に教えることで忘れない	50	聞くこと力

QRコードは、校長講話サイトです。ご参考に
なさってください。

<https://sites.google.com/tomi.ed.jp/touma>





校長講話への取り組みについて

宮古島市立池間小中学校 校長 下地 忠夫

一 はじめに

本校の校区は、宮古島市平良の池間島全域である。池間島は、市街地から北西一九キロメートルの位置にあり、周囲九キロメートル、面積二・七九平方キロメートルの馬蹄形をした島で砂地が多く、農耕地には恵まれていない。集落は、池間、前里の小字に分かれているが地形的、社会的には明確な区分はない。世帯数は四〇一戸・人口六六七人（二〇一九年一月一日現在）（から、世帯数は三四四戸・人口五二一人（二〇二二年一月一日現在）で、過疎化が進み児童生徒数も減少の一途をたどっている。

かつては、漁業で一本釣りが盛んであったが、高齢化が問題となつている。農業では、島の中央部でキビ作も行われている。

区民の大部分は、大主神社を崇拜し信仰心が厚く、伝統を尊び年長者を敬いながら海洋魂に富み、たくましく、明朗・温和で親近感がある。

平成四年二月十四日から池間大橋の開通により、平良と当地を定期バスが運行している。橋の開通に伴い島の人々は、島の活性化に向け取り組んでいる。

二 スタートする前に

本校の児童生徒数は一七名（小学生一名、中学生六名）で職員数は一四名である。地域と密着した活動が伝統的に続けられてきており、体験活動や地域行事が継続されてきていた。校長講話においては、計画的ではないが、その都度適宜に行われてきたようである。

校長一年目、本校においては、今年度より勤務することとなったが、小中併置校のへき地校ということもあり、他校との違いも多く、戸惑いの多いスタートとなった。地区の取り組みを参考にできたらと、簡易的ではあるがアンケートを実施した。

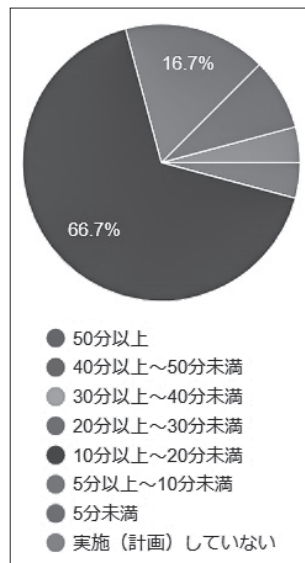
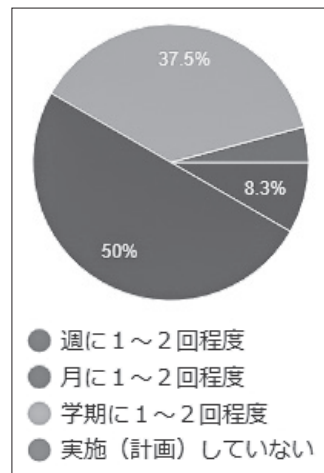
三 校長講話の地区アンケート

宮古地区管内の様子をアンケートにて確認してみると、次のような結果となった。

「講話の実施頻度」は、月に一〜二回程度が五〇％と最も多く、次いで学期に一〜二回三・七五％、週に一〜二回程度が八・三％で、実施していないが四・二％だった。

また、「一回の講話時間」は、一〇分〜二〇分が六六・七％と大半を占め、次いで五分〜一〇分

未満が一六・七％、五分未満は八・三％、二〇分〜三〇分未満は四・二％だった。



更に、「講話する場面」（複数回答可）においては、朝会が最も多く（八七・五％）で、その他、儀式的行事（四五・八％）、文化的行事（三七・五％）、体育的行事（三七・五％）、職員会議（二九・二％）、研修会（二五％）、PTA行事（八・三％）という結果となった。

「主な講話の対象」は、もちろん児童生徒が多く（九五・八％）で、次に職員（五〇％）、保護者・PTA（二五％）となった。

「講話内容」（テーマ）は、教育目標や学校行事等が多く、次いで人間関係や生活習慣、キャリア教育等についてが多くなった。

「講話の内容について留意していること」は、言葉を選ぶ（七〇・八％）、常に肯定的に話す

第七十五回 九州地区小学校長協議会研究大会佐賀大会に参加して



共感と温感そして響感の佐賀大会

石垣市立伊野田小学校 校長 真玉橋 真由美

一 はじめに

大会主題「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、副主題「多様な価値を持つ他者と協働し、持続可能で豊かな社会を創造する子供を育てる学校経営」のもと、第七十五回九州地区小学校長協議会研究大会佐賀大会が、八月二十二日～二十四日にかけて佐賀市において開催されました。

四年ぶりの対面開催となる本大会には、九州各県から九百余名の会員が集い、沖縄県からは、宮国義人会長をはじめ三十四名が参加しました。数年ぶりに再会した校長先生方と、福岡空港経由で懐かしい話に花を咲かせながら佐賀県に向かいました。佐賀県は九州で唯一観光したことがない県で、スケジュールに二カ所の観光が入っていたのも楽しみの一つでした。「佐野常民と三重津海軍所跡の歴史館」では、佐野常民(日本赤十字社創始者)と日本の近代化を支えた佐賀藩の功績を学び、国の特別史跡「吉野ヶ里遺跡」では、復元された物見やぐらや家屋を前に弥生時代の人々に思いをはせました。駅の近



くには「佐賀七賢人」の銅像が建ち、佐賀の歴史や偉人の功績を未来につなげていこうとする県民の意識の高さに驚かされました。

二 副主題設定説明

大会に先立ち、副主題の説明が行われました。

佐賀県小学校長会は、全連小研究主題の主意を「予測不能で劇的な社会の変化に対応できる子供を育てること」と「多様な価値を持つ他者と共に豊かな社会を創造する子供を育てること」の二点でとらえました。

この二点を実現するためには、学校の教育活動の全てをその本質を見据えながら社会に拓かれた新しい価値を持つ者に生まれ変わらせることが不可欠であること、校長は判断を迫られる局面で最適と思われる手段をとるのみでなく、より大局的な視点から未来を見据えた学校経営を推進することが求められていることを確認しました。

全連小報告

全国連合小学校長会 会長 植村洋司
全連小の価値や意義は、「つながり学び国に声を届ける」であり、「組織は、リーダーの力量以上には伸び

ない」という言葉が校長が学び続ける意味であると紹介されました。要望活動の成果は左記の通りです。

- ・一人一台端末の配備 (GIGAスクール構想)
- ・小学校全学年三十五人学級の実現 (R3 4月)
- ・教員免許更新制の発展的解消 (R4 7月)
- ・奨学金免除制度等

三分科会

一日目の午後は九つの分科会に分かれ、研究を深めました。参加した第二分会(組織・運営 評価・改善)の発表を報告します。

○第二分科会 組織・運営 評価・改善

研究主題 学校経営ビジョンの具現化を図る組織作りと運営及び学校教育の充実を図る評価・改善の推進

協議題① 学校経営ビジョンの具現化に向けた活力ある組織作りと学校運営の推進

テーマ マネジメント力が発揮される組織作りと目標を明確にした学校運営の充実を目指して

提案者 日向市立寺迫小学校 荒神雅彦校長

【主題設定の理由】

日向市では「ひょうが学びの学校」を掲げ、三位一体の教育(キャリア教育・小中一貫教育・コミュニケーションスクール)を推進しています。全校長が、学校経営ビジョンの具現化を図るための組織作りや組織を生かして積極的に学校経営に取り組むための具体的方策等を持ち寄り、学校規模や特色を生かした取組を研究しています。

【研究の実際】

- 1 学校経営ビジョンの具現化

- ・SWOT分析結果を生かし経営ビジョン策定
- ・校務部でゴールイメージの数値目標設定
- ・評価面談で進捗状況や達成状況の確認

2 教職員の適切な役割分担と連携

- ・校務部の再編による会議の精選と情報共有
- ・校内OJTも活性化による意識の高まり
- ・スタンドプレーの減少とチームプレーの高まり
- ICT活用による業務の効率化

3 課題提示と評価の工夫

- ・改善点から方策まで話し合う教職員面談
- ・経験年数に応じた感謝と期待のPDCA
- ・コミュニケーションスキルの充実
- ・PTAや地域と連携し充実した教育活動
- ・地域の伝統や芸能の継承の場の提供

【所感】

校長が明確な経営ビジョンを提示することで職員は具体的な数値目標を設定でき、組織の動きがスムーズに活発になる事が紹介されました。「行事はスリム化しても繋がりはスリム化しない」という言葉が心に響いています。

協議課題② 自ら未来を切り拓く力を育む教育を確かなものとする学校経営の評価改善

テーマ 学校評価の在り方と評価を生かした学校経営の改善
提案者 伊佐市立田中小学校 谷口善郎校長

【主題設定の理由】

教職員による自己評価、学校運営協議会委員による評価、児童・保護者へのアンケートを実施し、教育活動の改善を図ってきましたが、評価項目の整合性や評価基準に課題があり、評価の形骸化が見えましました。そこで、真に学校経営に生かすことのできる学校評価の在り方について研究を進めました。

【研究の実際】

- 1 成果を共有するための評価項目の見直し
- ・学校経営重点目標とリンクした評価項目

・児童・保護者・教職員の評価の整合性を図る・グループフォーラムを活用したアンケート実施

・児童・保護者アンケート集約後職員自己評価2
学校運営協議会制度による評価

・令和元年より市内全小中学校で実施
年間五回の授業参観・協議を実施

3 評価結果のフィードバック

- ・児童・保護者の結果は学級PTAで報告
- ・要望事項は今後の方針を示し組織で対応
- ・フィードバックはできるだけ早く誠実に対応

【所感】

「子供たちにより良い教育活動や環境を提供するための学校評価」という視点を保護者や地域に周知することで、教育活動に相乗効果が生まれることを強く感じました。

四 記念講演

演題 「小さな虫が世界につながる」

～そして佐賀へ帰る～

講師 国立科学博物館 動物研究部

陸生無脊椎動物研究グループ

農学博士 野村周平氏



「#地球を守れ 目標一億科博資金難でクラウドファンディング一週間で目標達成」驚きのニュースが流れた直後の講演でした。佐賀県生まれの野村氏は、甲虫研究の第一人者でアジア圏を中心に研究を進める傍ら九州大学大学院の客員教授をされています。

「昆虫嫌いな人に嬉しいお知らせ。昆虫は人間以上に巨大化しません。」

「昆虫嫌いな人に悲しいお知らせ。昆虫は地球上に満ち満ちています。1mに約6600匹。」

明るくわかりやすいお話は参加者をひきつけ、多

くの言葉を心に残しました。「無理だと嘆いても何も始まらない。実現できる方法を考え合い遊び心も加えると世界が楽しく変わってくる。佐賀県の田舎で虫が大好きだった少年は、昆虫を通して多くの人と出会い今に至っている。小さな虫が私と世界を繋いでくれた。コロナ禍で研究活動が難しくなり佐賀に帰った。すると研究のお宝がザクザクあった。今まで足下(故郷)にあることに気づかなかった。今

までは本当の価値が見えてくる。」野村氏の講話は、お宝はそれぞれの学校にあることに気づいてますか、本当の価値をしっかりと見ていますかと言われているように思いました。小さな事や今まで見ていなかったものに目を向けることの大切さを感じた講演でした。

五 おわりに

一昨年ハイブリッド型で開催した長崎大会。その「校長の学びを止めない」という思いを強く受け継いだ佐賀大会。

佐賀県小学校長会の大会コンセプト「共感と温感そして響き合う九州アフターコロナの時代をみんなで拓く」の通り、心地良い緊張感の中で意見を交わり、それぞれの実践に共感、仲間の温かさに温感、新たな気づきに響感する貴重な時間を体感しました。大会開催にご尽力いただいた皆さまに心から感謝いたします。次年度は沖縄大会。

「イチヤリパチョーデー美ら島沖縄で子供の未来社会を語ろう」

九州の仲間達を、大好きな沖縄に迎えるその日が楽しみです。



第七十四回 全日本中学校長会研究協議会大分大会 参加報告



第七十四回全日本中学校長会研究協議会
大分大会に参加して

宜野座村立宜野座中学校 校長 渡慶次 靖

一、はじめに

第七十四回全日本中学校長会研究協議会大分大会が、大会主題を「未来へつなごう学びの力豊の国 おおいたから」とし、令和五年十月二十五日(水)～二十七日(金)までの日程で大分県、ビーコンプラザを主会場とし、杉乃井ホテルを含め二会場で開催された。全国からは総勢千八百三十八名、沖縄県からは六十二名の小中学校校長が参加となった。

二、全体協議題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を作り出していく日本人を育てる中学校教育」

○第一研究協議題(全中提案)
「学校からの教育改革 近年の調査研究報告から読み取れる学校部活動に係る課題と地域移行に向けて」

全日本中学校長会 生徒指導部長 遠藤 哲也
令和四年スポーツ庁が公表した「学校部活動及び地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」の流れについての報告であった。
本校は、令和五年度より七年度にかけて学校運

動部活動の地域移行に向けた県研究校に指定されている。長らく学校教育の一環として、教職員の献身的な支えにより成り立ってきた部活動も現在は過渡期にあると強く感じる。

本校も同様に教職員の部活動に対する意識の変化、生徒の部活動加入率の低下やニーズの多様化などがあげられる。それらに対応すべく、これまでのように学校だけではなく地域や行政、保護者との連携がより一層重要になってくると改めて感じた。

○第二研究協議題(地区提案)
「主体的に言語・テキストを使いこなす生徒の育成に向けて」～PISA型読解力育成事業を通して見えてきたもの～

近畿地区 京都府宇治市立広野中学校 藤本 いずみ
文部科学省によると、PISA型読解力はOE

CDが自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力とされ、義務教育修了段階にある生徒が、文章のような「連続型テキスト」及び図表のような「非連続型テキスト」を幅広く読み、これらを広く学校内外の様々な状況に関連付けて、組み立て、展開し、意味を理解することをどの程度行えるかとしている。



藤本校長の取り組みとしては、各教科の特性を生かした課題解決型学習を取り入れ、単元のまとまりを提示し、最終の課題解決をレポートで理論的にまとめることで生徒の思考力や表現力の育成に努めたとの報告があった。沖縄県でもねらいの提示や根拠をもとに論述することが推進されていることからあらためて必要性を認識することができた。

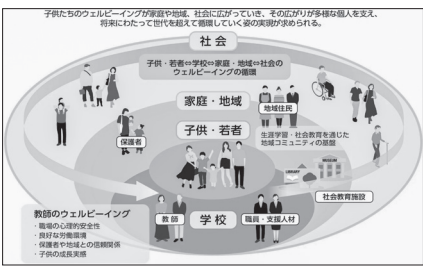
三、文部科学省説明会

「当面する「初頭中等教育上の諸課題」

文部科学省 大臣官房審議官 安彦 広斉

(初頭中東教育局担当・学校地域連携担当)

講演では、これからの教育を考えるうえで重要な社会の変化、人口減少やそれに伴う生産年齢人口の低下など客観的なデータを示し説明してくれた。自己肯定感の割合の低下やいじめの認知件数の増加(積極的に認知している結果と考えられる)、将来の夢や目標に



関する意識の低下、新たな教育振興基本法のコンセプト等、様々な事について学ぶことができた。

その中でもウェルビーイングについて、学校長として生徒や教師にとって居心地の良い場所をどのようにしてつくるのかなど、コミュニケーションスキルや生徒指導提要与の兼ね合いなども含め、個人的にも研鑽に励み、学校経営に役立てていきたいと感じる内容が多かった。



四、分科会（第二分科会）

研究主題 「主体的・対話的で深い学び」の実現

(一) ふるさと学習で育てる自己肯定感・自己有用感の獲得を通して

徳島県の三野中学校、熊澤校長から地域資源を活用したふるさと学習で主体的・対話的で深い学びの実現へ向けた取り組みの発表があった。

三野中学校は過疎化の地域であるが、小さいコミュニティの利点を生かし、地域人材の活用や「かずら工芸制作体験」など地域資源を大切にすることにより自己肯定感や自己有用感を高め、郷土愛を育む取り組みの報告であった。

主体的な取り組みを促進するために、あえて全校生徒九名が同じ題材を取り扱うことで「学び合い」が深まるとの報告があり、少人数でも意図的計画的に課題を設定することで学習が深まる良い

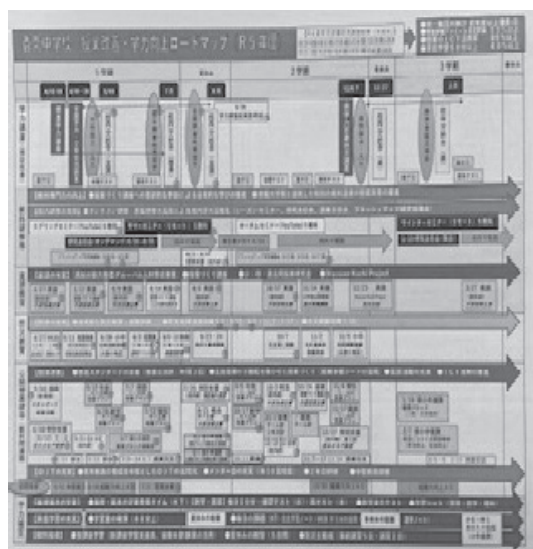
事例だと感じた。

本校も自然豊かなやんばるに位置しており、地域との協働、連携など共感させられることが多かった。

(二) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な育成を通じた課題改善

高知県南国市立香南中学校 安岡 裕高
高知県の香南中学校、安岡校長からはITCを活用した個別最適な学習と協働的な学習の一体的な取り組みについての報告があった。基礎学力の定着を目指すとともに、グローバル社会で特に求められているコミュニケーション能力の育成の一環として英語教育を学校全体で推奨しているとの報告があった。

また、地域人材を活用した事業を増やすことで地域の学校への参画意識が高まったとの報告は、本校の経営基盤の一つである「社会に開かれた教育課程」であると感じた。これからの学校は



高知県南国市立香南中学校学力向上ロードマップ

いかに社会（地域、家庭、行政）とコラボレーションしていくなかで、双方向、互恵関係を築き協働、共榮していくかが重要と考える。

ウェルビーイングの循環がなされ生徒や教師、そして地域全体の幸福感が高まる学校経営を目指していきたい。

五、おわりに

昇任校長として今年本校に赴任した私にとつて、今年度九州地区で全国大会が開催され、国頭地区、県内はもとより全国各地の校長と情報を交換することができたことは貴重な経験となり、他の都道府県の実情や各校長の思いや地域の特色に触れ、あらためて本校、本県を客観的に観るよい機会となった。

最終日に行われた日本文理大学チアリーディング部のアトラクションもすばらしく、地元の学生が参加することの意義とともに多方面の協力があつてからこそ開催できていることを感じた。

また、記念講演では工藤三郎氏の「スポーツ実況四十七年」感動を伝えるというこゝろと題し、アスリートや取材現場などでの秘話は驚きや感動、心が和むような話題が満載であった。

このように素晴らしい協議会を開催していただいた大分県中学校校長会の方々に対して心より感謝致します。ありがとうございました。





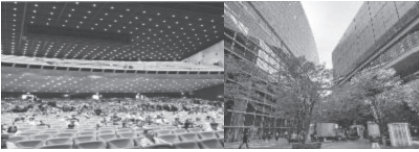
最初で最後の全国連合小学校長会 研究協議会に参加して

宮古島市立久松小学校 校長 友利 直喜

はじめに

「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を主題に、多様な人々と協働しながら新しい価値を生み出し、持続可能な社会と幸福な人生の作り手となる力を育む学校教育の推進を副主題として、第七十五回全国小学校長会研究協議会東京大会並びに七十五周年記念式典が、十月十九日(木)・二十日(金)の二日間にわたって、四年ぶりに参加型で東京都千代田区の東京国際フォーラムを主会場に開催された。

本大会は、都内四力所、十三の分科会場でも活発な意見交換がなされ、総勢三千人を超す各都道府県の校長先生方、そして記念式典にともなう表彰者等が集い、盛大に催された。ちなみに、本県からは宮国義人県会長を含めて県内各地区から集まった二十三名の校長先生と、県事務局から崎原永輝事務局長と比嘉紘美事務局長の二人、そして添乗員一名の計二十六名による参加となった。



私にとって、九州・全国規模の管理職としての研究大会は、十三年ぶり二度目で、平成二十二年の全国公立学校教頭会研究大会北海道大会以来であった。

開学会場に足を運んでまず感じたことは、平川惣一大会実行委員長を先頭に奮闘する東京都公立小学校長会の皆様方の頑張りである。全国から集う多くの皆様をまさに「おもてなす」体制が隅々まで行き届いていた。コロナ禍で得た知見と加速するデジタル化の流れをうまく取り入れ、まさにフルスベックでの大会運営を進めていただいたことに感謝したい。

新たな取り組みとして、①出席受付がQRコード化されている。②分科会でのテキストマイニングの活用(これは、即時に協議の可視化ができるという利点があり、本県の国頭大会でも一部の分科会で実施された)③式典・開閉会式・分科会のユーチューブ配信、シンポジウムのライブ配信。④アンケートのQRコードの活用した回答(この取組は、今や当たり前になりつつある)を体感することができた。

このように、昨年度から分科会運営で大会運営

に力添えしていただいている東京都公立小学校会の大会運営には、本当に頭が下がる思いが尽きない研究協議会・記念式典となった。

一 記念式典・開会式・全体会

大会一日目は、まず全国連合小学校長会七十五周年記念式典から始まった。会場の東京国際フォーラムAホールは、収容人員が五千人を超える大きさで、首都東京の中心・丸の内に位置するコンベンション&アートセンターである。この施設は、都心型MICE施設で、様々な人々が集い、交流し、多様性に満ちた文化と情報を発信する東京を代表するランドマークの一つと言われている。このような大規模なホールで、盛山正仁文部科学大臣のあいさつ、全国知事会会長・全国都道府県教育長協議会会長の祝辞の後、沖縄県からは次の方々に感謝状を贈呈された。



〔文科大臣感謝状受賞者〕

・宇江城詮、宮城末義、比嘉豊樹、浅井利眞
吉濱剛 以上七名

〔全連小学校長会感謝状受賞者〕

○常任理事
・宮平祐吉、崎原永輝 以上二名
○理事・監事・委員

・上原勝、比嘉信勝、垣花正男、桃原致上
外間香善、嵩原安哲、田港朝勝、本仲範男
安里恒雄、高森新一、與古田思信、島史生
上間亨、宮国義人、石川宏、森元幹生
山城勝美、濱元朝純、吉本勝、仲西起實 以上二十名

○都道府県・事務局 ・比嘉紘美 以上一名

受賞された皆様、誠にありがとうございます。引き続き行われた開会式では、植村洋司大会会長、平川惣一大会実行委員長のあいさつの後、盛山文科大臣、小池東京都知事（ビデオメッセージ）、千代田区長による祝辞などが行われた。

二 分科会

昼食・会場移動を挟んで一日目の午後から分科会が行われた。全体会の東京国際フォーラムが、実は新宿新都心にある現都庁に移転する前に東京都庁があった場所であることをホール棟に隣接するジンボリックな「ガラス棟」内の展示資料で知った私は、お昼をコンビニ食で軽めに済ませ、詳しい資料の見学と、施設の散策で時間を使い、ギリギリでの分科会参加となった。

私が参加した分科会は、Ⅲ指導・育成の第八分科会。会場は、新宿区にある市ヶ谷カンファレンスセンター五階Aホールで、参加者は百五十九名。かなり狭い中、私は六人編成の第②グループ（東京・神奈川・山形・広島・滋賀・沖縄）に参加した。分科会研究主題は、これからの学校組織を担うリーダーの育成であった。

研究の視点は、①学校校育への確かな展望を持ち、優れた実践力と応用力のあるミドルリーダーの育成 ②社会の変化に主体的に関わり、自ら磨き高め続ける管理職人材育成であった。「教科等研究員制度」を通して、リーダー育成に取り組む香川県の事例。校務分掌・校内研修・人事評価等を用いてミドルリーダーの育成を目指す群馬県前橋市校長会の事例が発表



され、多くのグループで熱い意見交換がなされた。私のグループ内で、一番に残った話題は、「管理職になって欲しい人材になりたい人材」が違ふこと。働き方改革の推進と並行して、管理職（リーダー）の育成の困難さを、どの自治体でも、どの学校の管理職も課題として抱えているということであった。

三 全体会・文科省講話・シンポジウム

閉会式（紙面の関係で簡略化）

全体会で行われた「大会宣言」の中から特に私が伝えたい部分は次の一文である。「小学校教育においては、全ての子どもたちの可能性を引き出すため、今まで以上に学習者主体の教育活動に転換し、新たな学びを定着させるとともに、教員の質の向上、デジタル化への対応を総合的に進める必要がある。そして、誰一人置き去りにしない教育を実現するため、個別最適な学びと、協働的な学びを実現し『生きる力』を確実に育むことが学校教育の責務」だと記してある。

また、閉会式では次期開催県の徳島県の代表が、美しい映像とともに、令和六年度大会開催への決意と歓迎を述べた。

四 懇親会

大会一日目の夜、周辺に皇居や国会議事堂、国立劇場、英国大使館等がある半蔵門のホテル近くの中華飯店で、沖縄県一行のみの懇親会が行われた。甲斐達二県副会長の進行のもと、宮国会長のあいさつ、各地区毎の参加者自己紹介、崎原事務局



長による漢字クイズ等で盛り上がり、急に閉会のあいさつを任された私が思いついたのが、「三つの拍手」であった。①高倍率の応募をぐぐってここに集う仲間、②全国から四年ぶりに集いし校長職の仲間に、③参加に向けてご尽力いただいた事務局・添乗員に、参加者が互いに拍手を贈り合っ

おわりに

私にとって、今回の大会参加の動機は、退職の年を迎え、全連小大会への参加のチャンスが最初で最後であること。開催地が首都東京であること。そして四年ぶりの完全参集型の大会であること。三つであった。私から、次年度以降も管理職として学校運営に携わる皆さんへ、今大会の中で私の心が一番刺さった言葉、全連小・植村洋司会長の言葉を引用して、報告を閉じたいと思う。

「どんな困難があっても、その本質を問い考え、いかに実現できるのか知恵をしぼり、組織として力を合わせ前に進む校長でありたいと思います。私たち校長は、自らの使命を強く自覚し、志高く挑戦し続け、子どもたちと学校の未来を見据えたビジョンをもち、確かな判断力と決断力をもって実行し、信頼に応える学校づくりに努めなければなりません」
管理職最後の年に、このような貴重な機会与えてくださったことに感謝申し上げます。報告とします。



第七十四回 全日本中学校長会研究協議会大分大会 参加報告



未来へつなごう学びの力 豊の国大分から

竹富町立大原中学校 校長 石原 昌 英

はじめに

「新たな時代を切り拓き、より良い社会を形成していく、日本人を育てる中学校教育」を大会主題として第七十四回全日本中学校長会研究協議会大会が十月二十六日(木)～二十七日(金)の日程で盛大に開催された。沖縄県からは近年希に見る多数の六三名、八重山地区から七名が参加した。今回は、四年ぶりに参集型の開催でアフターコロナという転換期の中、私たち校長が学校経営の責任者としての使命感と確固たる教育理念を持ち課題解決に向けたビジョンのヒントが随所に織り交ぜられた実り多き大会となった。

一 開会式・全体会

(一) 全日本中学校長会会長 齋藤 正富氏

令和三年四月に中央教育審議会から「令和の日本型学校教育」が示され、各中学校では全ての生徒の可能性を引き出す「個別最適な学びと協働的な学び」「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組を展開するとともに、新たな教育活動の構想を念頭に生徒の「学びの保障」が重要とのメッセージがあった。また、働き方改革の更なる

加速化、処遇改善、指導・運営体制の充実、育成支援を一体的に進めることが「次期教育振興基本計画」に明記され、その具現化には校長のリーダーシップと実行力が重要であると強調していた。

(二) 第七十四回全日本中学校長会研究協議会
大分大会実行委員長 山本豊氏

中央教育審議会は教育政策における総括的な基本方針として「二〇四〇年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根ざしたウェービングの向上」を掲げている。

今大会は「全日中新教育ビジョン」の趣旨を踏まえた八つの分科会研究題に迫る各地域や学校における成功事例や先進的な取組を共有し、得られた知見や情報を今後の学校経営の更なる充実に活かしてほしい旨、あいさつがあった。

(三) 文部科学省講話

文部科学省大臣官房審議官(初等中等教育局担当) 安彦広斉氏による講話は以下の内容で行われた。

- ① 新たな教育振興基本計画について
- ② 教育課程について

③ 生徒指導、進路指導について

④ コミュニティ・

スクールと地域学校協働活動の一体的推進について

⑤ 専門高校について

⑥ 教師の資質能力向上について

⑦ 特別支援教育、英語教育の充実について

⑧ 学校における働き方改革について

⑨ 小学校における三十五人学級の計画的な整備と高学年の教科担任制の推進について

⑩ GIGAスクール構想の推進について

⑪ 部活動地域移行について

⑫ 学校における新型コロナウイルス感染症への対応について

二 分科会

第一分科会「カリキュラムマネジメント」の推進
「研究の視点」

各学校において教科等の目標や内容を見直し、特に学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応して求められる力の育成のために、教科横断的な学習の充実や主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められており、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図る「カリキュラムマネジメント」に努める必要がある。



研究発表Ⅰ

唐津地区中学校長会の相互支援を通じたカリキュラム・マネジメントの推進

佐賀県唐津市立馬渡中学校 吉村典浩校長

研究の概要

唐津地区中学校長会では定例校長会や自主校長会または事務システムポータル（佐賀県の校務支援システム）を活用



した情報交換等における校長同士の相互支援を通してカリキュラム・マネジメントの推進を図るための研究。

- ① カリキュラム・マネジメントについてアンケートを行い各学校の状況を把握し整理
- ② アンケート項目ごとに各学校のカリキュラム・マネジメントの方法や実施等を集約し情報共有
- ③ 「校長会」において、年間を通しカリキュラムマネジメントについて情報交換や相互支援

研究発表Ⅱ

学校教育の改善・充実に向けた「社会に開かれた教育課程」の実践

沖縄県竹富町立小浜中学校 美差淳司校長

研究の概要

八重山地区小中学校会の中学部会に所属する四校の校長（小浜中学校、竹富中学校、黒島中学校、西表中学校）が「カリキュラム・マネジメントの推進」に迫る実践研究。

- ① 各学校で伝統的に行われてきた体験活動等を教科横断的にカリキュラム編成し海洋教育の視点から系統立てる。

- ② 体験学習を事前学習・事後学習・未来のための力と学習デザインを作成する。

- ③ 各学校でめざす生徒像の実現に向け校長のリーダーシップを発揮する。

研究の実際として、(ア)竹富町教育委員会との連携、(イ)海洋教育特例校の設置、ウ海洋教育を基盤とした体系的な取組、(エ)体験活動の目的の明確化、(オ)校長のリーダーシップによる諸取組の視点から特色ある実践的な取組。

【所感】

研究発表Ⅰでは、唐津地区中学校長会のカリキュラム・マネジメントに関するアンケート結果から得られた各学校の状況等を把握し、併せて「事務システムポータル」を活用して校長同士の相互支援を行っている。また、「いきいき学ぶからつっ子育成事業」の運用で人的・物的資源の活用でも情報共有しながら自校の学校教育目標を達成するため校長同士が相互支援を行っている。

研究発表Ⅱでは、竹富町内の各地域や島々で伝統的に行われてきた体験活動等を教科横断的にカリキュラムを編成し、竹富町教育委員会が進める海洋教育を基盤とした特色ある取組を行っている。具体的には海洋教育副読本を活用し、地域資源や地域人材と連携・融合し多種多様な体験活動を行っている。沖縄県を代表して特色ある研究発表をした美差淳司校長先生には会場から共感と賞賛の声や拍手が鳴り響いていた。

三 記念講演

演題…「スポーツ実況四十七年々感動を伝えるということ」

講師…工藤 三郎氏

プロ野球、陸上競技、ゴルフ、スキージャンプな

ど、約四〇年にわたってNHKのスポーツ実況放送に携わってきた工藤三郎氏。オリンピックは、冬季八大会、夏季四大会の計一二大会で実況を務め、数々の名シーンを伝えてきた。二〇一八年夏にNHKを退職後はフリーアナウンサーとしてスポーツを中心にテレビやラジオなどで幅広く活躍。特に冬季オリンピックに深く関わってきた経験をもとにメディアの視点からオリンピック・パラリンピックや、日本スポーツ界について動画を視聴しながら感動エピソードを織り交ぜた講演だった。特に印象深かったのが、昨年の甲子園覇者仙台育英高校野球部の須江航監督と今年の甲子園覇者慶應義塾高校野球部の森林貴彦監督の「言葉の力」が選手の可能性を最大限に発揮させたこと。侍ジャパンの栗山英樹監督も選手を信じ抜き「言葉の力」と信念を貫き世界一に輝いた逸話に感動した。校長も同様に「言葉の力」で子ども達の可能性を最大限に高めていく存在でありたい。

おわりに

校長に赴任して三年目で全日本中学校長会研究協議会に初めて参加でき多くの学びを得ることができた。全体協議会、分科会、記念講演等では最新の有益な情報や校長として必要な資質や力量等、とても刺激的な大会であった。特に、第一分科会の研究協議では、カリキュラムマネジメント推進の視点から「チーム」として機能するための組織「マネジメント」について各県から参加した校長先生方と意見交換ができ大変有意義であった。結びに、豊の国大分で学んだ、熱く、温かく、絶え間なく湧き出す温泉湯のように、未来を担う子ども達の可能性を高めていく学校経営に邁進していきたい。

沖縄県小・中学校長会会報第85号

発行者 沖縄県小・中学校長会
住 所 那覇市松尾1-6-1 (沖縄県教職員共済会館八汐荘3F)
電話 098-943-9747 FAX 098-943-9748
E-mail: oki-koutyukai2@kca.biglobe.ne.jp (事務局長)
oki-koutyukai1@kpe.biglobe.ne.jp (事務局員)

印刷 株式会社 国際印刷
電話 098-857-3385 FAX 098-857-3892
E-mail: kokusai@herb.ocn.ne.jp
